

子育て支援にかかわる専門職への社会の熱い期待は高まるばかりである。新保育所保育指針では、保育の質向上に向けて「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性が強調された。子育て支援のプロには、子どもと保護者の「真のニーズの見極めと気づき」による「もっとも的確な実践」「実践の評価」そして「よりよい実践へのフィードバック」という支援ループを活用した「**根拠に基づく支援**」が求められている。「**経験的な根拠**」と「**科学的な根拠**」を車の両輪とした「**プロ技**」の発揮である。

プロの役割は、「**子育て、子育てのエンパワメント**」<sup>1,2)</sup>、つまり子どもと保護者が持っている**子育て力、子育て力を最大限に引き出し、十分に発揮できるような環境を整える**ことである。そのためには、つねに「**根拠を見据える**」、そして「**根拠を活かす**」**プロ技**が不可欠である<sup>3)</sup>。

本書では、私たちが20年間にわたり子どものすこやかな成長に影響する要因を科学的に分析した根拠を踏まえながら、それを子育て・子育てエンパワメントに活かす方法について整理した。既刊「保育パワーアップ講座」の続編として、実践の場で、根拠に基づく支援を展開するための具体的な活用の事例を集めたものである。保育士、幼稚園教諭、養成校教員と学生、児童相談所職員、保健師、社会福祉士、NPO、行政職など、子育て支援に携わるすべての専門職が、根拠に基づく支援に向けて、容易に活用できるよう工夫した。

もとより、子育て力や子育て力を育む支援は、すべてが支援ツールなどで測りきれぬ単純なものではない。複雑で割り切れないものだからこそ、「**だれもが納得できる道筋（支援設計）**」と「**目的別にわかる範囲が明らかにされている地図やものさし（支援ツール）**」を活用しながら、自信をもって「**確実な実践**」に取り組むことができる。

たとえば、「すこやかな育ちを育む」実践を計画する場面を考えてみよう。一般的な子どもの発達とのずれはどの程度なのか、気になる行動はみられるのか、まず「**客観的なものさし**」で確認する。何らかの「**気づき**」につながるかもしれない。それを踏まえることで、のびのびとした意欲、他の子どもへの思いやり、新しい事態への適応性、精神的な安定性、幸福感、新しい物事への興味、創造性など、「**ものさし**」では測れない大切な育ちについても、さらにプロ技に磨きをかけることができる。

本書は3つの部分で構成されている。

まず第1の柱として、**根拠に基づく支援の基本的な考え方や方法**をあげた。

第1章では「**根拠に基づく支援の基本**」として、根拠に基づく支援の意義や実践に生かす方法を解説した。だれもが納得できる「**根拠に基づく支援の設計法**」として、「エンパワメント支援設計」の方法を具体的に解説した。これは、支援の全体像を①目標、②現状、③背景、④影響要因、⑤支援内容、⑥根拠の順に、わかりやすく整理したものである。また「**根拠に基づく支援ツールの活用法**」では、プロ道具のサンプルとして、具体的にわれわれが活用している「**発達評価ツール**」「**育児環境評価ツール**」「**保育環境評価ツール**」「**気になる子ども支援ツール**」「**対人技術発達評価ツール**」について概説した。

ついで第2の柱として、根拠に基づく支援への**具体的な活用例**をあげた。

すべての節で4つの枠組みにそった記述に統一し、流れがつかみやすいよう配慮した。まず「**①エンパワメント支援設計**」を提示し、支援の全体像と道筋を論理的に示した。ついで「**②ツールの活用と具体的な方法**」で、どのツールのどの部分を、どのように活用するか、またその活用の意味を明らかにした。さらに「**③成果とツール活用の有効性**」で、複数のツールを活用する有効性や、今後の展開への足がかりとしての意味などを整理した。最後に、対象とした事例について、「**④ツール活用のポイント**」として、うまく活用するにはこんなコツがある、などのノウハウをわかりやすく解説した。

第2章では「根拠に基づく子どもへの支援」として、発達がゆっくり傾向、生活リズムの乱れ、生活習慣や食事に関する課題、健康面で気になる子どもについて、具体的な事例をあげて説明した。

第3章では、「根拠に基づく保護者への支援」として、家庭でのかかわりが乏しい、育児に自信がない、ストレスが高い、障害児の保護者のネットワーク、一時保育・子育て支援サークル利用者について示した。

第4章では「根拠に基づく専門技術の向上」として、日常保育や研修への活用、他機関との連携、地域ぐるみの子育て支援への展開について具体例を示した。

最後に第3の柱として、根拠に基づく実践の蓄積の意味と今後の展開についてあげた。第5章では「根拠に基づく支援の実践活用の考え方」として、実践の中での事例の読み方、マニュアルやツールの使い方、エンパワメント支援設計の考え方などをわかりやすく解説した。第6章では「子育て・子育て支援プロの質を高めるために」として、確実に継続的な取り組みの成果から、さらなる展開に向けてのポイントについて提案した。

子育て・子育て支援のプロは、「論理的な思考と技術に裏付けされたあたたかなまなざし」を持つ。本書が、子育て・子育て支援のプロにとって、「**プロ技**」をさらに磨く**エンパワメント**の契機となれば幸いである。

保育パワーアップ研究会  
筑波大学 教授 あんめ 安梅 ときえ 勅江

